

題目 地域差、移住者を考慮した都市の魅力の構成要素に関する研究

九州大学 学生会員 内山晴太

1. 目的

● 研究背景及び動機

日本の人口は2008年の1億2808万人をピークに減少に転じている。令和2年現在、日本全国1,719市町村のうち、1,416市町村(82.4%)で人口が減少しており(国勢調査人口速報集計、2020)、地域コミュニティや集落機能の維持が困難となっている。交流人口、関係人口を増加させ地域の活力を取り戻そうとする動きがあるが、これらは定住人口を補完するものと考えられ、地域の維持は困難である。定住人口の確保には、地域活性化などの移住者が魅力を感じるまちづくりが必要である。そこで、都市の構成要素が、そのまちの魅力にどのように影響しているのかを明らかにすることができれば、今後の人口誘致政策に進めるうえでの一つの指針になると考えた。

● 先行研究及び課題

Romao et al.(2018)が、被説明変数を人口増加および観光需要とし、都市機能がそれぞれに異なる影響を与えることを示した。また、Kourtit et al. (2018)は居住者から見た都市の魅力に着目し、精神や歴史からなる'soul'の部分とインフラや緑地からなる'body'の部分が住民の都市愛にどのように影響するかの分析を行っている。このように都市の魅力に関する研究は多数行われている。しかし、地方や都市などの地域差や、定住者または移住者といったグループ差にまで考慮した先行研究は見受けられなかった。

● 研究の目的

これらの現状に対し、本研究では都市の構成要素と人々が感じる魅力の関係の地域差・グループ差を分析することを目的とする。以下の三点について検証する。

- ・被説明変数を住民アンケートに基づいた「住みやすさ」と「生活満足度」として分析を行う。
- ・都市の構成要素がその地域の魅力に与える影響について、地域差が存在するのかを明らかにする。
- ・分析対象を定住者又は移住者に限定した検証を行う。

2. 研究の方法

● データ

本研究では、2015年11月16日から12月14日までの間、日本全国約20万人を対象に実施したオンライン調査のデータを用いた。この調査で行った具体的な質問項目としては、居住地域における住みやすさ、生活満足度、交通不満、市政評価、居住理由、引越しの有無、引っ越す前の前居住地域、および個人属性である。また、都市圏と地方圏を区分するためのデータを作成した。地域区分については、都市圏を三大都市圏、地方圏を三大都市圏以外とした。国土数値情報で公開されている三大都市圏データを取得したのち、オンライン調査データにマージし分析に用いた。

● 分析①(因子分析)

まちの魅力を示す指標に影響を与えるる潜在変数を決定すべく、オンライン調査での質問項目から交通不満に関する項目(23項目)、市政評価に関する項目(21項目)、居住理由に関する項目(23項目)を選定した。因子分析の結果、計11の潜在変数が得られた。具体的には、交通不満因子が「公共交通サービスの利便性」「道路交通」「駅・バス停へのアクセス」、市政評価因子が「交通、公園・街路樹」「地域振興」「教育、医療、子育て」「周辺環境」、居住理由因子が「公共施設へのアクセス・充実度」「居住環境(個人宅)、周囲の環境(自然)」「人間関係(家族・友人)、馴染み」「物事情形」である。

● 分析② (回帰分析)

本研究では以下の式のように回帰式を設定した。

$$Y_i = \beta_1 \times \text{交通不満因子}_i + \beta_2 \times \text{市政評価因子}_i + \beta_3 \times \text{居住理由因子}_i + X_i' \beta + \delta_R + \varepsilon_i$$

ここで Y_i は地域の魅力を示す指標であり、具体的には「生活満足度」と「住みやすさ」である。 X_i' は性別、年齢、収入などの個人属性を示すコントロール変数である。 δ_R は都道府県別の固定効果である。本研究では、各因子が地域の魅力を示す指標に与える影響の地域差及び定住者・移住者間の差を明らかにするために、7つのグループで分析を行った。具体的には、「全国」「都市圏」「地方圏」「10年以上都市圏(定住者)」「地方圏から都市圏(移住者)」「10年以上地方圏(定住者)」「都市圏から地方圏(移住者)」である。

3. 結果

表1に地域ごとの推計結果を示す。表の各列は、被説明変数を住みやすさ(住)及び生活満足度(満)としたときの各地域における結果を表しており、各行は因子が1増加した時の各指標への影響を表す。

表1：推計結果

	(1)全国_住	(2)都市圏_住	(3)地方圏_住	(4)全国_満	(5)都市圏_満	(6)地方圏_満
公共交通サービスの利便性	-0.0924***	-0.0879***	-0.0901***	-0.0247***	-0.0494***	-0.00295
道路交通	-0.0243***	-0.0256***	-0.0275***	-0.0582***	-0.0448***	-0.0740***
駅・バス停へのアクセス	-0.111***	-0.136***	-0.0826***	-0.0233***	-0.0272***	-0.0188***
交通、公園・街路樹	0.0575***	0.0608***	0.0500***	0.0195***	0.0187***	0.0201***
地域振興	0.0207***	0.0165***	0.0275***	0.0690***	0.0742***	0.0612***
教育、医療、子育て	0.00875**	-0.00517	0.0296***	0.103***	0.102***	0.106***
周辺環境	0.168***	0.180***	0.150***	0.0688***	0.0693***	0.0675***
公共施設へのアクセス・充実度	0.122***	0.109***	0.145***	0.0122***	0.00912**	0.0196***
居住環境・周囲の環境	0.0443***	0.0466***	0.0423***	0.0522***	0.0489***	0.0580***
人間関係、馴染み	0.00934***	0.0114***	0.00586	0.0106***	0.0114***	0.00823
物件事情	0.0575***	0.0478***	0.0741***	0.0588***	0.0551***	0.0653***
N	195194	123391	71803	195194	123391	71803
R-sq	0.161	0.164	0.156	0.133	0.138	0.128

表1の列(2)・(3)・(5)・(6)に示すように、居住理由として「人間関係、馴染み」があることは、住みやすさ及び生活満足度に対して都市圏では正の相関(0.0114)があったが、地方圏では相関は見られなかった。また、列(5)・(6)において、「公共交通サービスの利便性」(の不満度)は地方圏では生活満足度との相関はなかったが、都市圏では負の相関(-0.0494)があった。

4. 結論

「人間関係、馴染み」が都市圏でのみ有意となったのは、都市圏の居住者に単身者が多いことが原因としてあげられる。都市圏では進学や単身赴任による単身者が多く、住民の入れ替わりが多いため、帰属意識が低下し家族や友人などへの依存度が高くなると考えられる。また、「公共交通サービスの利便性」(の不満度)が都市圏でのみ生活満足度に有意な相関があったことに関しては、都市圏では公共交通の生活への浸透度が高いためであるといえる。

5. 今後の計画

今後は、移住者を考慮した結果についての考察を行っていく。現時点で、定住者・移住者ごとの推定結果は得られ、予想していたように両者の間で統計的に有意な差がみられている。しかし、この差の原因の具体的な考察まではできていないため、今後はさらなる先行研究の調査を行いながら、本研究の結果が意味するものを明確にしていく。